

2019/10/29

至近距離の宇宙 日本の新進作家 vol. 16

Close-up Universe: Contemporary Japanese Photography vol. 16

2019年11月30日（土）— 2020年1月26日（日）



齋藤陽道〈せかいさがし〉より 2019年

開催概要

「日本の新進作家」は、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するとともに、新たな創造活動を紹介する場として2002年より開催しています。第16回目となる本年度のテーマは「至近距離の宇宙」です。

一般的に世の中では、家を出ないこと、遠くに行かないこと、広い世界を見ようとしなないことは否定的に受けとられ、様々な国々へ出かける活動的なことは肯定的にとらえられる傾向にあります。その一方、近年では、インターネットで世界の隅々の風景を見ることができ、世界中のものを出かけることなく手に入れることができるほか、VRやホームシアターなどによって家にいながらリアルな臨場感や没入感を持って映像体験ができるなど、どこかに行かずとも何でもできることを、グローバル化とともに人々は積極的に受容しています。本展では、ごく身近な身の回りに深遠な宇宙を見だし作品を制作する6名の新進作家をご紹介します。

本展のみどころ

「身近な日常」に「深遠な宇宙」がある

第16回目を迎える本展はさまざまな方面で活躍が期待される6名の作家たちが、「至近距離の宇宙」をテーマに制作した、126点(予定)をご紹介します。

作家たちは身近な日常や個人的な関心から、それぞれの宇宙を見つけています。それは、新しい発見や驚き、不思議な体験や神秘的なできごとまでさまざまです。そして、それは個人的なものでありながら、普遍的なものをも表現しています。私たちは、それぞれが自分の宇宙を持っています。そして、他者の宇宙を理解しようとする時に生じる「ズレ」や「わからないこと」が、わたしたちに新たな視座を与えてくれるのではないのでしょうか。わからないからもっと知りたくなる宇宙のように、新進作家たちによる意欲的な表現をお楽しみください。

いま、東京都写真美術館が注目する6名の新進作家

本展でご紹介する作家は、国内外で作品を積極的に発表し、独自の表現活動を続けています。

藤安淳(1981-)は、双子であるという自身の経験を出発点に、自他認識の違いを探求しています。

井上佐由紀(1974-)は、抗うことのできない自然への畏怖をテーマに対象をみつめます。

齋藤陽道(1983-)は、暮らしのなかの何気ない出来事への気付きに、やさしいまなざしを注ぎます。

相川勝(1978-)は、ビデオゲームやスマートフォン、プロジェクターなど現代的な機材をつかって写真作品を制作します。

濱田祐史(1979-)は、身近な材料を用い、自然の風景に見立てた写真で、鑑賞者の認識を揺さぶります。

八木良太(1980-)は、見慣れた素材を使った実験的な作品を介して、みえている・きこえている、という知覚の共感に対する不確かさを私たちに体験させてくれます。

彼らの写真・映像表現を通じて、だれもが「深遠な宇宙」が自分自身のすぐそばにあることを発見できることでしょう。

鑑賞を深める多彩なプログラム

本展では、展覧会の楽しみかたを広げる多彩なプログラムをご用意しています。

「作家とゲストによる対談」では、出品作家と、文学・音楽などの分野で活躍するゲストを迎え、多角的な視点から作品の世界を語りあいます。「担当学芸員によるギャラリートーク」では「手話通訳つき」でも開催し、手話を必要とする方も、そうでない方も、ともに作品の理解を深める場となります。また、ギャラリートーク開催日にあわせて「託児サービス」も実施します。

展示室内に集まったひとがいっしょに、対話を交えてじっくり鑑賞する「対話型作品鑑賞会」や、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」など、さまざまなプログラムを通して、新しい美術の楽しみかたを体感していただけます。

出品点数

計126点(予定)

藤安 淳 (ふじやす じゅん 1981-)



〈empathize〉より 2011年

[中略] 今まで双子として生きてきたことで向き合わざるを得ないいくつかの問いに改めて直面した。1つは、自分自身が双子であることを意識する必要性があるのか。また1つは、自分と顔の似た存在が知らないうちに自分として認識され、扱われている世界があることへの恐怖感とどう対峙すべきか。さらには、第三者から幾度となく見比べられるような眼差しに晒される中で、自分の「個」としてのアイデンティティをどのように確立すべきか。

(作家ステートメントより抜粋)

藤安 淳 Fujiyasu Jun

1981年、東京都生まれ。2007年、写真表現大学修了。2008年「第1回塩竈フォトフェスティバル写真賞」大賞受賞。2014年「in)(between. ShaShin Book Award 2014」優秀賞受賞。主な個展に

「empathize」(The Third Gallery Aya、2012-17年)、「KG+SELECT 12 Artists: 『Sense of Wonder』」(元淳風小学校、2019年)等。自身が双子としてこの世に生を受けたことで向き合わざるを得ないいくつかの問いを基に、アイデンティティや人間の存在の本質、そして写真における様々な要素について考察しながら撮影、制作する。

井上佐由紀 (いのうえ さゆき 1974-)



〈私は初めてみた光を覚えていない〉より
2014年

[中略]

終わりに向かう祖父の目を見ながら、ふと初めて光を見る赤子の目を見たいと思うようになった。それから私は20名以上の出産に立ち会い、赤子の目を撮り続けている。

[中略]

いつか何も見えなくなるときはきっとくる。
その時がくるまで、私は新しい光を見たい。

(作家ステートメントより抜粋)

井上佐由紀 Inoue Sayuki

1974年、福岡県生まれ。1997年九州産業大学芸術学部写真学科卒業。主な個展に「私は初めてみた光を覚えていない」(nap ギャラリー、2018年)等。サンフランシスコ現代美術館に作品が収蔵されている。海の波をとらえた〈Intentionless Creature〉、間欠泉を撮影した〈over and over〉、赤子が生まれて目を開いた瞬間を撮影した〈私は初めてみた光を覚えていない〉など、「恐れ、畏れ、怖れ」をテーマに独特のタッチでとらえたシリーズを発表。

齋藤陽道 (さいとう はるみち 1983-)



〈せかいさがし〉より 2019年／2018年

[中略]

逃れえないこの身体、この国、この時代。ここから動けない。それでも、進んでいく。進んでいる。どこへ。内側の奥へ。底へ。底へ。外見上では何も変わらないようでも、その裡では、生老病死に染まりながら、諦めても諦めきれず、それでもなんだかあの果てへと深化していくものがある。

たったひとりの行ないが、なんという大勢へと繋がりうるのは、なんという大勢のひとりずつの内側にも「深化するもの」を抱えているからではないか。

深化する感動あればこそ、未だ見えざる未来をそれでもなお明るく望もうとする一個人の願いが、光を放ち、無辺へと受け継がれていく。そう信じている。

(作家ステートメントより抜粋)

齋藤陽道 Saito Harumichi

1983年、東京都生まれ。都立石神井ろう学校卒業。「キヤノン写真新世紀」にて2009年佳作、2010年優秀賞受賞。2014年「日本写真家協会賞」新人賞受賞。主な個展に、「宝箱」(ワタリウム美術館 2014年)等。主な写真集に2011年「感動」(赤々舎)、2014年「宝箱」(ぴあ)、そのほかエッセイなど多数出版。あらゆる種別や境界を超えて、身近な人々を被写体とし、真っ直ぐに対象と向き合い撮影された写真の特徴とする。

相川 勝 (あいかわ まさる 1978-)



左：〈landscape〉より 2019年

右：《cloth, container, hose, plastic》2019年

スマートフォンで撮影する時、撮影者はカメラのアイコンを選択して撮影し、スワイプやピンチをしてトリミングをし、フィルタをかけるなど擬似暗室作業を繰り返してイメージを形作っていく。[中略]

私はプロジェクターやスマートフォンの光を用いて撮影する。それは私も同じようにカメラを使用することなく、デバイスにアクセスする行為のみで撮影をしていると言える。私の作品では被写体が実在しないものが多い。被写体が実在するかなどは大した問題でない。何故ならば、私たちは他者が作り出したイメージのなかで生活しているからである。[中略]

〈landscape〉シリーズは一見、現実の風景のように見える。しかしこのイメージは、オープンワールドと呼ばれるビデオ・ゲームの中の仮想空間である。プロジェクターで投影されたイメージを感光剤が塗布されたパネルに印画している。[中略]

《cloth, container, hose, plastic》と〈layer〉の作品は、共に、暗室作業をシミュレーションするよう設計されたphotoshopへの興味から生まれた作品である。photoshopの「透明レイヤー」に実存の物質のフォトグラムを重ね合わせたり、ドラッグされたスマートフォンの光のレイヤーを重ね合わせている。

いずれの作品も「写真とはなにか」という疑問の旅の末、暗室の中で生まれ出た作品である。

(作家ステートメントより抜粋)

相川勝 Aikawa Masaru

1978年、ペルー共和国生まれ。2004年多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース卒業。主な展覧会に「六本木クロッシング2010：芸術は可能か？」展（森美術館2010年）、

「Art Meets02 大西伸明・相川勝」（アーツ前橋、2015年）等。2009年に自身の思い入れのあるCDのパッケージから内容までを絵筆と声により複製した作品〈CDs〉を発表し注目を集める。近年は、プロジェクターを使用した撮影手法を用い、実在と架空のイメージとその境界をテーマにした作品を発表している。

濱田祐史 (はまだ ゆうじ 1979-)



〈Primal mountain〉より 2011年

2011年3月11日、東日本大震災が起こった。震災後の情報の不確かさに揺れた日常のなかで、メディアから私たちが受信している情報と、目の前にある現実のギャップを感じていた。

[中略]

しばらくして、山の写真のポストカードが届いた。それを見た時、美しい山だと思ったと同時に、どこか偽物に見えたことから「写真における山のイメージは我々の中にそれぞれあって、見た人によって想起するイメージは異なるのではないか」と考えた。[中略]

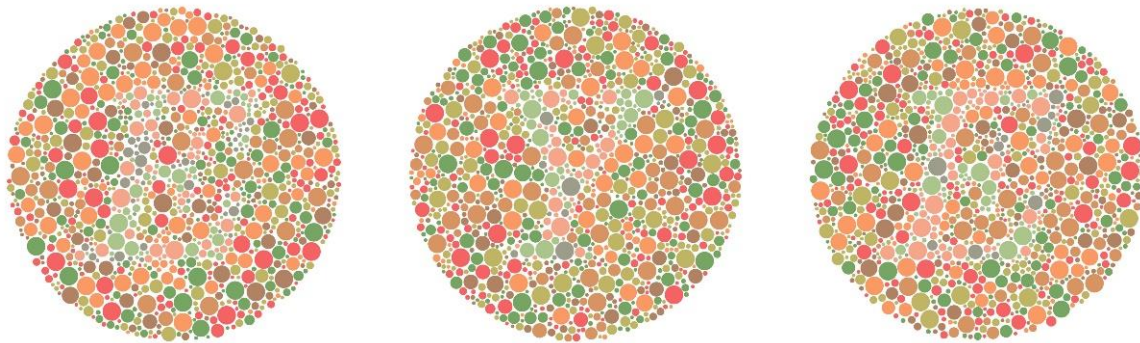
作り手の主観で完結する山ではなく、見る人の頭の中に“最初に浮かび上がった山”という意味を込めて、タイトルは「Primal Mountain」と名付けた。

(作家ステートメントより抜粋)

濱田祐史 Hamada Yuji

1979年、大阪府生まれ。2003年日本大学芸術学部写真学科 卒業。主な個展「Photograph」「Primal Mountain」(Galerie f5,6、ミュンヘン、ドイツ 2016年)、「RGB」(PGI 2018年)等グループ展に「The Sun Placed in the Abyss」(コロンバス美術館 2016年)等。写真の原理に基づき概念を構築し、ユニークな技法で常に新しい試みを行う。近年では写真における色の三部作〈C/M/Y〉〈RGB〉〈K〉を制作し発表している。

八木良太 (やぎ りょうた 1980-)



《On the Retina》 2016年

ひとつのものを見るとき、隣人が同じものを見ていても、同じように見えているわけではない。立体視や、錯視に関する作品を作るうちに、そう感じるようになってきた。[中略]

一般的に、鑑賞者は制作者の見ているものを見ようとする。そういった関係を反転させてみたかったので、特定の色覚を持つ人にだけ見える、色覚検査表のパターンを応用して作品を制作してみた。そうすることで、私には見えないものを提示できると思った。[中略] 赤緑色覚異常のある人は、青色のグラデーションの差を、健常者と呼ばれる人たちより微細に見分けることができるということだ。私には見えない、ずっと豊かな空や海の青を想像すると楽しくなってきた。

(作家ステートメントより抜粋)

八木良太 Yagi Lyota

1980年、愛媛県生まれ。京都造形芸術大学芸術学部空間演出デザイン学科卒業。2015年「六甲ミーツ・アート大賞」グランプリ受賞、2017年「京都府文化賞」奨励賞受賞。主な個展に、「サイエンス/フィクション」(神奈川県民ホールギャラリー、2014年)「MUSIC FOR LAZY SUSAN」(無人島プロダクション、2018年)等多数。見たいものしか見ない・聞きたいことしか聞かないといった、我々の制限的な知覚システムあるいは態度に対する批判的思考をベースに、既製品を用いて作品を構成し、その現れによって人間の知覚やそれを利用した工学的システムを浮かび上がらせるような作品を制作する。

関連イベント

作家とゲストによる対談

2019年12月20日(金) 18:00-19:30	濱田祐史×増田玲(東京国立近代美術館主任研究員)
2019年12月21日(土) 15:00-16:30	齋藤陽道×イ・ラン(シンガー・ソングライター、作家) ※手話通訳付き(会場:1階 スタジオ)
2020年1月12日(日) 15:00-16:30	藤安淳×竹内万里子(批評家)
2020年1月13日(月・祝) 15:00-16:30	井上佐由紀×穂村弘(歌人)
2020年1月18日(土) 15:00-16:30	相川勝×中尾拓哉(美術評論家)
2020年1月25日(土) 15:00-16:30	八木良太×日下部一司(美術家)

会場:2階ロビー(12月21日は1階スタジオ)

定員:各回50名

当日10時より1階受付にて整理券を配布します。番号順入場、自由席。

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

以下の日程で担当学芸員によるギャラリートークを行います。

2019年12月13日(金)、27日(金)、2020年1月4日(土)、5日(日)、10日(金)、24日(金) 14:00より
2020年1月17日(金)18:00より

本展チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

手話通訳つきギャラリートーク

担当学芸員によるギャラリートークを手話通訳つきで行います。

2019年12月27日(金) 14:00-

2020年1月10日(金) 14:00-

2020年1月17日(金) 18:00-

本展チケット(当日消印)をご持参のうえ、
2階展示室入口にお集まりください。



参考図版

「TOPコレクション たのしむ、まなぶ
イントゥー・ザ・ピクチャーズ」展より(2018年)

託児サービス

子育て中のお客様に展覧会をゆっくりお楽しみいただけるように、下記の日程で託児サービスを実施します。

日時:2019年12月13日(金)

2020年1月10日(金) いずれも13:00-16:00

定員:各日8名程度(お子様の年齢によります)

申込方法:事前予約制。株式会社マザーズ(TEL 0120-788-222)までお電話でお申し込みください。

*利用日前日の17:00まで受付可能(受付時間12:00-13:00、土日祝を除く)

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。

日 時：2019年12月15日(日)、2020年1月11日(土) いずれも10:30-13:00

対 象：どなたでもご参加いただけます。

定 員：各日7名 事前申込制、先着順。

参加費：500円

対話型作品鑑賞会

参加者で対話を交えながら作品を鑑賞します。(作品解説ではありません)

日 時：2019年12月5日(木)、12月26日(木)、2020年1月9日(木) 18:30より

本展チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

申込方法など詳細は決定次第、当館ホームページにてお知らせいたします。
事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

『至近距離の宇宙 日本の新進作家展 vol. 16』

主な出品作品図版のほか、担当学芸員テキスト、作家ステートメント、作家略歴等を収録。

A5判、東京都写真美術館発行、価格未定

開催概要

展覧会名[和] 至近距離の宇宙 日本の新進作家展 vol. 16

展覧会名[英] Close-up Universe: Contemporary Japanese Photography vol.16

主 催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、東京新聞

会 場：東京都写真美術館 2階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 / URL www.topmuseum.jp

開館時間：10:00-18:00 (木・金は20:00まで。1月2日[木]、3日[金]は10:00-18:00開館)

※入館は閉館の30分前まで

休館日：毎週月曜日(ただし、1月13日[月・祝]は開館、1月14日[火]は休館。年末年始12月29日[日]から1月1日[水・祝]は休館)

観覧料：一般 700(560)円 / 学生 600(480)円 / 中高生・65歳以上 500(400)円

※()は20名以上の団体料金

※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第3水曜日は65歳以上無料 ※1月2日(木)と3日(金)は無料。

※1月21日(火)は開館記念日のため無料。※各種割引の併用はできません。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 武内厚子 a.takeuchi@topmuseum.jp / 石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp